

『マックス・ヴェーバーの犯罪』をめぐって

On Max Weber's Crime

千葉 芳 夫

要 旨

羽入辰郎の『マックス・ヴェーバーの犯罪』は衝撃的な書であった。その主張の中心は、ヴェーバーは「コリント I」七・二〇がルターにおける“Ruf”から“Beruf”への用語の移行を示す個所だと述べているが、原資料に当たって調べたところ、ルターは“Beruf”とは一度も訳していない、ということにある。よって、ヴェーバーの中心的な論旨は崩れる、と彼は批判しているのである。

だが、ヴェーバーは、この個所を“Ruf”から“Beruf”への移行ではなく、“Beruf”という語の二つの意味を橋渡しするところだとしている。つまり、羽入は誤読に基づいてヴェーバーの主張を作り上げ、それを否定した、ということなのである。

キーワード：羽入辰郎、マックス・ヴェーバー、Beruf 概念

序

羽入辰郎の『マックス・ヴェーバーの犯罪』は、ルターが“Beruf”という語をヴェーバーが主張するようには使っていなかったということを文献学的に明らかにしたという点でも、さらに、ヴェーバーを「詐欺師」、「犯罪者」と非難した点においても、衝撃的な書と受け止められた。

この書に対しては、すでに出版の翌年に折原が詳細な批判の書を出しており、また、ウェブ上でなされた議論を中心に『日本マックス・ウェーバー論争』がまとめられている¹⁾。だが、これらでは、学問における倫理性や理念型概念の問題性などへと論点が拡散し、羽入のヴェーバー批判の論点が反って分かりにくくなっている。また、ルターが“Beruf”を「職業労働」という意味で用いた、という点を羽入が否定したのだ、という誤解も生じているようである。この論考では、羽入がヴェーバーのどこをどう批判

したのかをもう一度振り返り、ヴェーバー解釈という問題に絞って彼の議論を検討してみたい。

1. 羽入の指摘

羽入が問題としているのは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（以下では、『プロ・倫』と略す）の一部三節「ルターの天職概念」の初めに出てくる注の部分である。そこでヴェーバーの主張とは違って、ルターが「コリント I」七・二〇を“Beruf”と訳していない、ということが彼の主張の中心となっている（羽入、81頁）。

最初に、彼がヴェーバーの主張の論点として整理したものを引用しておこう（羽入、76～77頁）。

- (1) ルターは「コリント I」七・二〇における“身分”の意味を含んだ「クレーシス」を“Beruf”と訳した。
- (2) 初期における“Ruf”から“Beruf”へのルターの用語の揺れ(…), 及び、後者へと

訳語が暫時確定していったプロセスを「コリントⅠ」七・二〇そのものが証している。

- (3) 「コリントⅠ」七・二〇における勧告と「ベン・シラの知恵」一一・二一における勧告との双方の勧告における事柄としての類似性に影響されたために、前者の勧告「コリントⅠ」七・二〇において“Beruf”という訳語を自身が用いたことに引きずられ、ルターは後者の勧告「ベン・シラの知恵」一一・二一においても、元来は宗教的観念を全く含んでいなかったギリシャ語「ポノス」をも、「コリントⅠ」七・二〇におけると同様“Beruf”と訳すに至った。それは同時に、ルター個人の「神の全き特殊な摂理へのますます精緻化されてきた信仰」に影響された結果でもあった。

- (4) 「神の不変の意志によって望まれたものとして世俗の秩序を甘んじて受け入れようとする…彼の傾向」が、後に外典を翻訳した時期ほどにはまだ高まっていなかった「数年前」の時期に翻訳された「箴言」においては、したがってルターは訳語として“Beruf”ではなく“Geschäft”を選んだ。

■ したがって、ルターの用語法の研究に際して、「箴言」二二・二九における“Geschäft”を考慮に入れる必要はないのである。

これだけでは、何が問題になっているのか分からないだろうと思われるので、少し解説を加えておこう。

ヴェーバーは、『プロ・倫』一章二節で、「資本主義の精神」の例として、フランクリンの言葉を引いている。その中に、フランクリンが聖書のある箇所を“calling”と訳したということが出てくる。これが「箴言」二二・二九である。そして、ヴェーバー当時の聖書では“Beruf”と訳されている箇所をルターはまだ“Geschäft”と訳していた、という注を付け、さらに後

の注を参照するよう求めている（S.36, 50頁）。そこで指示された注が、羽入の問題としている注なのである。

これは、先にも述べたが、一章三節の、本文に比して異常に長い3番目の注である。この注に至るヴェーバーの論旨は、次のようである。

ドイツ語の“Beruf”には、「世俗的職業労働」と「神から与えられた使命」という二つの意味が同時に含まれている。このような語は、プロテスタントの優勢な諸民族以外には見られず、しかも、それは聖書の「翻訳者達の精神」に由来している。「ルターの聖書翻訳では、まず『ベン・シラの知恵』の一個所（一章二〇、二一節）で現在と全く同じ意味に用いられているように思われる。」（S.65, 95～96頁）ここに問題の注が付けられているのである。

さて、「資本主義の精神」は、「世俗的職業労働」を「神から与えられた使命」とする観念に由来し、こうした観念はルターにおいて成立した、というのは、『プロ・倫』の一般的な解釈に属することであろう。そして、ヴェーバーは、ルターが“Beruf”という語を「世俗的職業労働」を意味する語として初めて用いたのが、「ベン・シラの知恵」の一個所だところで述べているのである。

ここで確認しておくべきは、この点を羽入は批判していないということである。本来宗教的な意味をもっていた“Beruf”を、ルターが初めて、「世俗的職業労働」をも意味する語として用いた。このヴェーバーにとって「決定的な」主張を羽入は認めているのである。では、羽入が問題とする「コリントⅠ」七・二〇とは、いったい何なのか。

2. 「コリントⅠ」七・二〇問題

これが何を問題としているかを明確にするためにも、この注におけるヴェーバーの議論を追っておく必要がある。

まず、ルターが初めて“Beruf”という語を世俗的職業労働の意味で用いたのであり、それ以前にはこの語（およびそれに相当する諸民族の語）は、この意味では用いられたことがない、という本文中でも述べられていることが繰り返されている。

そして、ルターは、「まったく異なった二つの概念を“Beruf”と翻訳している。」一つは、ギリシャ語の「クレシス」である。これは、「神によって永遠の救いに召される」という「純粋に宗教的な概念」である。第二に、「ベン・シラの知恵」において、世俗的職業労働（あるいは苦役）を意味する「ポノス」を“Beruf”と訳している。「ルターによる『ベン・シラの知恵』のこの個所の翻訳は、私の知るかぎりでは、ドイツ語の“Beruf”が今日の純粋に世俗的な意味に用いられた最初の場合だ。」とヴェーバーは述べる。(S.66, 102～103頁)

ただ、“Ruf”については、ルター以前にタウラーがその語を世俗的職業労働の意味で用いている。しかし、これは全くの例外であって、「この語は、こうした意味でもって、世俗的用語の中に入りこんでいくことはなかった。」(S.66, 103頁)

この後、羽入が問題とする個所が出てくる。(I)「ルターも、最初のうちは“Ruf”と“Beruf”の間を揺れている…。」(S.66, 103頁)だが、ルターへのタウラーからの直接の影響は明白ではない。「というのは、ルターは、最初はこの語をタウラーの右の一句にみるような純粋に世俗的な意味には用いていないからである。」(S.67, 104頁)

ここで段落が変わり、「ベン・シラの知恵」における用語法が論じられる。

『ベン・シラの知恵』の訓戒は、一般に神への信頼が勧告されている以外、世俗的『職業』労働(“Beruf” s-Arbeit)に対して独自の宗教的評価などが加えられているわけではない…。」ただ二〇節の最初の勧告は、福音書の「クレ

シス」とやや近い意味をもっているが、「ここではルターは“Beruf”の語を用いていない。」(II)「ルターにおける“Beruf”という語のこうした一見全く相異なる二種の用語法に連絡を付けてくれるのは、『コリント人への第一の手紙』の中の章句とその翻訳だろう。」(S.67, 104頁)ここで、羽入が問題とする「コリント I」七・二〇が出てくるのである。

この節は、「現在普通に見られる」ルター訳聖書では、「各自は、召されたままの状態(Beruf)に止まっているべきである」となっている。しかし、(III)「ルターは1523年にこの章の釈義で、まだ古いドイツ語訳にならってクレシスを Ruf と翻訳し、さらに Stand(「身分、状態」)の意味に解している。」(S.67, 105頁)この場合に限って、「クレシス」が“Stand”に相当することは明白だとヴェーバーは述べ、羽入もそれを認めている。

つまり、「コリント I」七・二〇においては、通常は「神によって永遠の救いに召される」という「純粋に宗教的な概念」である「クレシス」が、例外的に身分あるいは状態という世俗的な意味で用いられているのである。

その後、ヴェーバーは、次のように言う。(IV)「ところで、ルターは、各自その現在の状態(gegenwärtiger Stand)に止まれ、との終末観に基づく勧告の場合にクレシスを“Beruf”と翻訳したが、そののち旧訳外典を翻訳した時に、各自その業(Hantierung)に止まるべきであるとの、『ベン・シラの知恵』の伝統主義・反貨殖主義に基づく勧告においても、両者(勧告)がただ内容上(事実上)類似している(sachliche Aehnlichkeit)ことから、ポノスを“Beruf”と翻訳している。(これこそが決定的なまた特徴的な点なのだ。)」(S.68, 106頁)

これで、羽入が問題としている、「コリント I」七・二〇、および、「“Ruf”から“Beruf”へのルターの用語の揺れ」が、何を一というよ

リーヴェーバーの議論のどこを対象にしているかは理解されたであろう。

3. 羽入説の検討

羽入は（Ⅰ）を“Ruf”から“Beruf”へと訳語が変わっていった、と解釈し、さらにそれを（Ⅱ）、（Ⅲ）、（Ⅳ）に結びつけ、ルターが「コリントⅠ」七・二〇における「クレシス」を最初は“Ruf”と訳し、後には“Beruf”と訳すようになったとヴェーバーが主張している、というのである。

だが、ヴェーバーが「コリントⅠ」に言及したのは、「ルターにおける“Beruf”という語のこうした一見全く相異なる二種の用語法に連絡を付ける（Die Brücke zwischen jenen beiden anscheinend ganz heterogenen Verwendungen des Wortes Beruf bei Luther）」（S.67, 104頁）個所としてである²⁾。「ルターにおける“Beruf”という語の…二種の用語法」を“Ruf”と“Beruf”の二語の用語法ととるのは無理であろう。

羽入自身も次のように言っている。「ここでの『一見全く異なる二つの用法』という表現が、“Beruf”という語の二つの用い方の違い、すなわち、一方では『コリントⅠ』一・二六、『エペソ』一・一八、四・一、及び四・四等…での『使徒によって告知された福音を通じて神によってなされ給う召しという純粋に宗教的な概念』（…）としての意味での用法と、他方では『ベン・シラの知恵』一一・二〇、二一における『今日における純粋に世俗的な意味での』（…）用法との違いのことを指していることは、…すぐに分かることである。」（羽入、107頁）ヴェーバーの論旨を追えば、これが正しい解釈だと思われる。

だが、羽入は一度はこのように解釈しているにもかかわらず、「コリントⅠ」七・二〇を“Ruf”から“Beruf”への変化を示す個所として

論を進めてしまうのである。

また、（Ⅰ）の解釈も問題である。「最初のうちは“Ruf”と“Beruf”の間を揺れている」という個所を、羽入は「後者へと訳語が暫時確定していったプロセスを『コリントⅠ』七・二〇そのものが証している」と解釈している。「後者へと訳語が確定していった」ということは含意しうるのであろう。だが、それを「コリントⅠ」七・二〇が示している一つまり、ルターは最初は“Ruf”と訳した個所を後には“Beruf”と訳すようになった—とする解釈には無理がある。

折原は、この「揺れ」を、ある個所の語が「たとえば初期の“Ruf”から後期の“Beruf”に変わるという」「時間的な揺れ」ではなく、複数の個所にまたがる「空間的な揺れ」だ、と解釈している（折原、78頁）。前後の文脈から考えて、—そもそも、この「揺れ」への言及が、論の本筋を離れた注の中の注とも言うべきものである—この折原の解釈は妥当だと思われる。

また、ヴェーバーは「最初のうちは（anfangs）…揺れている」と言っているものであり、これを最初は“Ruf”を使い、後には“Beruf”を使った、とは解釈できないであろう。

羽入は、先に挙げた解釈によって、ヴェーバーの論旨を「ルターにおける“Ruf”から“Beruf”への訳語の変遷史をたどる」（羽入、84頁）ものと理解しているが、こうした語の変化が問題となるのは、それが信仰の深化や変化と関連している限りにおいてであろう。ヴェーバーは“Ruf”を「古いドイツ語訳」と捉えているだけで、それと“Beruf”の意味の違いについては、なにも述べてはいない。そうであれば、「“Ruf”と“Beruf”の間を揺れている」というのは、ルターがどちらの語を使うか迷っていたということ、さらに言えば、それをほぼ同義の語として使用していたことを意味することになる。とすれば、—専門的なルター研究や宗教史なら別だが—“Ruf”から“Beruf”へと変化した時点を突き止めること自体には何の意味もない、

ということになる。

そもそも、ヴェーバーが『プロ・倫』のこの部分で主張しているのは、“Beruf” が「神から与えられた使命」と「世俗的職業労働」の二つの意味を含んでいること、および、この語を最初に後者の意味で用いたのがルターであった、ということである。この注は、それをさらに詳しく説明したものである。この二つの意味を橋渡ししているのが、「コリント I」七・二〇であるが、羽入は、それを“Ruf” から“Beruf” への橋渡しをしている個所と誤って解釈してしまったのである。

つまり、羽入は、誤読によって「ヴェーバーの主張」を作り上げたうえで、それを原資料に当たって否定して見せたということになる。

4. 残された問題

こうして、羽入の論そのものは否定される。だが、それで一件落着、とはいかない問題が残されている。それは(IV)の文章である。羽入は、「各自その現在の状態に止まれ、との終末観に基づく勧告」を「コリント I」七・二〇を指すものとしており、これが彼の主張の一つの根拠となっているようである。だが、ヴェーバーが明確にそう述べているのではない。むしろ、文章の流れからすれば、そうとはとりにくいのである。というのは、少し前の文で、ルターは1523年には“Ruf”と翻訳していた、とヴェーバーが述べているからである。その後、特段の説明もなく、突然ルターがそこを“Beruf”と訳した、と言っているとは考えにくい。

宇都宮は、ヴェーバーが特定の章句を引用するときには、どこであるかを明示し、場合によってはギリシャ語やヘブライ語の原語を示しているのに、この個所はそうになっていないことに注意を促し、ここが特定の章句の引用ではない、と解釈している(宇都宮、125～126頁)。折原もこの「勧告」を特定の章句を指すのではなく、

「一般的な勧告」だと解釈している(折原、133頁)。

確かに、すぐ前で引用したのと同じ個所を、表現を変え、またどの章句と明示もせずに引いたとは考えにくい。上に述べた文章の流れから言っても、宇都宮や折原の解釈は妥当なものと思われる。だが、意味の上からは、ここは“Beruf”の「二つの意味」を繋ぐ個所なのだから、「コリント I」七・二〇を指さねばならない。つまり、表現や文章の流れからは「コリント I」七・二〇ではないが、意味の上からは「コリント I」七・二〇でなければならないのである。このようなことが可能であろうか。

折原も宇都宮もこの「勧告」が「コリント I」七・二〇をも含む章句の抽象的表現と解している。だが、「コリント I」七・二〇ではルターはまだ“Ruf”を使っていたのだから—しかも羽入によれば、生涯“Ruf”と訳し続けたのだから—，“Beruf”と訳した、というのは間違いだということになる。

折原は、これをヴェーバーが“Beruf”と“Ruf”との違いにそれほど拘らなかったことによる「小さなミス」だとしている(折原、133頁)。「小さなミス」かどうかの判断は措くとして、先に指摘したように、ルターの“Ruf”と“Beruf”の間の揺れが、両語をほぼ同義で用いていたことを意味するのであれば、ヴェーバーは両語の違いにさほど拘る必要はない、と考えていたと推測しうるであろう。

つまり、この個所は不正確な表現なのであり、正しくは「…“Beruf”あるいは“Ruf”と翻訳した」と言うべきであったろう。先に指摘した、表現と意味との食い違いを解消するには、この解釈しかないように思われる。

この不正確な表現に先に述べた誤読を重ね合わせて、羽入は「ヴェーバーの主張」なるものを作り上げているのである。

これで、羽入の論拠は完全に崩れることになる。

そもそも、羽入の解釈はヴェーバーの関心に沿ったものではない。彼は“calling”と“Geschäft”そして“Beruf”および“Ruf”という語の関連を辿ることが『プロ・倫』の中心的な論旨だとしている。しかし、ヴェーバーの関心は「訳語の変遷史」自体にはない³⁾。だから、かりにこれに関して不十分な点があったとしても、それを責めることはできないであろう。

だが、確かに、細部へ細部へと入り込んでいくヴェーバーの文章は読みにくい。時として、何が本筋か分からなくなってしまう。こうした文章の書き方をこそ「犯罪的」だと言うのであれば、諸手を挙げて賛成するのだが。

注

1) 折原浩、『ヴェーバー学のすすめ』、未来社、2003年。橋本努・矢野善郎(編)、『日本マックス・ウェーバー論争』、ナカニシヤ出版、2008年。

2) 岩波文庫版の大塚訳では、ここは「Beruf」に関するルッターのこうした一見まったく相異な

る二種の用語法に…」となっており、意味が不明瞭になっている。

3) だからこそ、この問題は注の中で扱われたのであろうし、「資本主義の精神」の直接の起源とされるカルヴィニズムに関しては、“Beruf”(あるいはそれに当たる)語への言及は見られない。

文 献

羽入辰郎、『マックス・ヴェーバーの犯罪』、ミネルヴァ書房、2002年。

宇都宮京子『『コリントⅠ』七・二〇問題再考』、橋本努・矢野善郎(編)、『日本マックス・ウェーバー論争』所収。

Weber, M., 'Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus' in *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I*, J. C. B. Mohr, 1920. 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、岩波文庫、1989年。

(なお、『プロ・倫』の場合は、原文と訳文の頁だけを表記した。また、訳文は変更している場合がある。)

(ちば よしお 佛教大学社会学部教授)